静岡の天理教―近県へ、さらに遠方へ

天理大学附属天理図書館
天理教文献室
早田　一郎　*Ichiro Soda*

静岡県における天理教は、おやしきから遠方であるにもかかわらず教祖ご在世中に広まり、教会の設立も早かった。静岡からさらに隣接県へ伝わり、東北、北海道など遠方へも伸展した。布教拠点としての意味も大きい。

静岡に初めて本教が伝わったのは明治15年である。近畿以外では徳島県と共に早い。ここから現山名大教会の道が始まる。一方、少し遅れるが明治22年には現嶽東大教会の布教も始まる。両教会の伝道活動により明治29年末までに50もの教会が静岡県内に誕生する。同じ時期、他の系統は２教会があるのみだった。この傾向は現在も変わらず、静岡県内教会の65パーセントが山名と嶽東を元として始まったものである。

明治15年、大阪真明組の信者吉本八十次が東京の帰路、人から誘われるまま静岡県広岡村下貫名の諸井國三郎の家へ立ち寄りしばらく働くことになった。吉本は諸井家やそこで働く人たちに教えを伝えた。年の暮れに「おぢばの神様の手伝いがある」と帰ったが、諸井家の三女が身上になった時、吉本に教わった通り神様にお願いするとよくなったという。不思議な神様だと感じた諸井國三郎は自らどんな神様かを確かめるためおぢばに帰り教祖にお目にかかった。明治16年のことである。

教祖にお目にかかり、本当の神様だと悟ると帰郷してすぐおたすけを始めた。この時から諸井の猛烈な布教が始まり、短時日の間に静岡県西部一帯に天理教が広まる。

明治21年、教会本部設置の年に山名分教会も神様から許される。明治29年末までに静岡県内にできた教会は52カ所であるが山名系が36にのぼり、全体の約70パーセントを占める。

その設立年は明治21年に１カ所（山名）、同23年２カ所（益津、白羽）。その後も25年以降毎年８、８、７、８、２の教会が設立されている（『天理教教会所在地録』立教173年版）。

山名系36カ所の分布は県の西側３分の２に多い。山名分教会の設立場所である広岡村は現在の袋井市広岡で県西部にあたる。その近辺の村や町に諸井はじめ信仰を始めた人たちがおたすけに歩いた。明治20年代前半は広岡の北にある森町、東方に位置する掛川、藤枝、島田の町、西では浜松をはじめ浜名湖周辺の町村など山名分教会を取り囲むように四方の町や村に相当な勢いで広まっていった。

この勢いは明治20年代後半になっても続き、静岡市や富士山麓の町村、さらに伊豆半島方面にまで伸展する。この結果が県内36の教会となって現れるのである。

なお、当然のことながら山名分教会を元とする各教会の伝道活動は静岡県内にとどまらない。明治29年末、静岡県外の山名系教会は100近くにのぼった。その主な場所は千葉、埼玉、山梨、愛知の各県、さらに福島などの東北地方である。

静岡におけるもう一つの大きな流れとなる嶽東大教会（設立当時は出張所）に話を移そう。明治21年、今のＪＲ草津線敷設工事のため滋賀県に出向していた静岡県駿東郡大岡村（現沼津市大岡）の鈴木半次郎は、子供の身上から水口系の布教師井上佐市にたすけられ、まず妻よねが入信した。翌22年には半次郎も信仰を始め、佐市と共におぢばに帰り、教えのすばらしさに感激した。鉄道の仕事を終えると大岡村に帰っておたすけ活動に入り、明治25年には嶽東出張所を設立する。

嶽東の伝道は大岡村周辺に伸び広がり、明治29年末には静岡県内に14の教会が誕生する。前述の通り山名系と合わせて50カ所である。その分布が富士山南麓、東麓と伊豆半島であるのは、当時、すでに山名系が遠州、駿河地域に伸びていたためであろうか、嶽東系はその東、つまり富士山より南と東になった。

嶽東系統の教会は山名系と同じく明治29年末時点、すでに県内より県外に教会が多かった。その数、16カ所で隣県神奈川に多い。これは嶽東の西には山名系教会があったため、布教地を求める時、自ずと東方面となり、それが県境を越え神奈川県に入り込んだのであろう。明治20年代の教会が沼津から裾野、御殿場、伊豆半島、三島、熱海に設置された。これらは伊豆半島を除くとみな神奈川県との境界である。ここを越えると小田原、足柄、秦野などの町村で、これらの地域に明治20年代設立の嶽東系教会があることで理解できる。

静岡からの伝道、すなわち山名、嶽東の二つの伝道線は本教を取り巻く様々な社会情勢に左右されながらも、明治30年以降も伸展は続く。その伝道地は隣接地はもちろん東北、北海道、さらに台湾など遠隔地である。これにも簡略に触れておく。

白羽支教会（現大教会）会長小栗市十は明治26年弟子の二藤藤一郎に東北の状況を探るよう依頼した。もちろん布教地としての適否を見るためである。最初は仙台を見聞する予定だったが諸井國三郎の助言で福島に立ち寄ることとした。行ってみると福島は天理教の入った形跡がなく、布教地として最適だった。この結果は諸井國三郎に伝えられ全山名を挙げて東北に布教師を送り込むことになる。

天理教のこれまでの歴史において、伝道地選定は個人の思いで決めていた。しかし山名の東北布教は全山名が組織的に取り組んだものであり、画期的な出来事と言っていい。東北の伝道については後の本連載で述べることになるが、福島県をはじめ東北各県に山名系教会が多いのはこの時の結果である。

山名はこの他、明治30年から台湾布教を開始した。台湾ではたばこ栽培や植林などの殖産事業を行い、翌年には早くも教会を建てた。台湾の人たちに天理教を分かりやすく見せようとの思いであろう。このことも海外伝道の方法としては画期的である。海外は国内と同じ思いや方法では難しいということは今ではよく知られている。しかし、伝道の方法論など、おそらく考えていなかったであろう時代に、直感的？に適応したのはまさに画期的である。この件も別の機会に触れることになろう。

さて嶽東系が神奈川県に伸びたことを書いたが、遠隔地の北海道と青森にも伸びた。明治30年代に千葉県館山に道がつき、そこからさらに北海道への伝道が始まる。現在の網走大教会の道である。もう一つの北海道伝道は現秦野大教会の布教師が北海道の開拓地である旭川方面に伝道したことから上川分教会に発展する。また、伊豆にあった現北豆分教会の布教師が明治27年青森県八戸に布教し、やがて小南部大教会に発展する。これらもそれぞれの地域について述べる時に触れることとしたい。

静岡は早期に天理教が伝わり、県内にも県外にもさらに遠隔地にも伸展したという伝道史上特異で稀なところである。